

勇氣は一瞬、後悔は一生

富岡市立北中学校

三年 齋藤 希羽

皆さんは見えて見ぬふりをしたことはありませんか。

「誰かがやるだろう」と他人が行動を起こすのを待ち、自分には関係ない、巻き込まれたくないと避けている人もいるでしょう。いじめを知っても関わらないようにしたり、困っている人がいても声をかけずに素通りしたり。皆さんの中にも心当たりのある人はいませんか。

昨年の三月、空手の全国大会で京都に行った時のことです。電車に乗っていると、少し離れた所で外国の方が何かを話しているのが聞こえました。「Kyoto station」そんな言葉が聞こえ、私はすぐに京都駅へ行きたいのだとわかりました。しかし、周囲の反応に驚きました。何人かに声を掛けているのに、若い男性は

耳のイヤホンに手をやり聞こえないふり、サラリーマン風の男性は外国の方の訴えに右手だけを挙げ、スマートフォンをいじったまま目も合わせません。周囲の人たちもまるで見て見ぬふりなのです。私は自ら声を掛ける勇氣もなく、その外国の方は京都駅ではない二つ手前の駅で慌てて電車を降りていきました。「わざわざ私が駆け寄ってまで声を掛ける必要はないよね。」と思いつつ、「あの人、無事に京都駅に行けたかな。」とずっと考えていました。そして、心のモヤモヤはしばらく晴れることはありませんでした。

昨年の十二月、私の中で心を動かす出来事が起こりました。兄が近所をジョギング中、迷子になっていたお年寄りを保護したのです。日も落ちかけていた薄暗い道を、お年寄りは一人で歩いていました。近所では見かけたことのないお年寄りを心配し尋ねると、「ここがどこかわからない。」「どこに行こうとしていたのかもわからない。家に帰りたい。」と訴えたそうです。こんな寒空の下、一体どのくらい歩いていたのか。お年寄りの手は氷のように冷たく、兄はすぐさま一一〇

番通報し、駆けつけた警察官により無事保護されました。私はその話を聞いて、兄の咄嗟の判断と一瞬の勇氣に感心しました。もしも、兄が声を掛けずに、万が一のことがあれば「あの時、声を掛けていたら」と、一生後悔していたかもしれません。ですが、同時に見ず知らずの人に声を掛ける勇氣が私にはあるのだろうか、私も兄と同じように行動に移すことができるのだろうかと考えました。兄は「特別なことはしていない、見て見ぬふりができなかっただけ。」と言っていたけれど、玄関に飾られた感謝状は私にとって勇氣の金賞に見えました。

そんな今年の三月、再び全国大会で京都を訪れた時のこと。私が京都駅で父と電車を待っていると、外国の夫婦が路線を迷い、困っている姿が目飛び込んできました。私も中学三年生になり、以前より英語が聞き取れるようにはなりましたが、英語は話せない。「上手く伝わらなかったらどうしよう。」と不安な気持ちでいっぱいでした。ですが、勇氣を振り絞って声を掛けてみました。「What's wrong?」すると、外国の夫婦は

「Can I get to Fushimi Inari on this train?」「How many stops away is Fushimi Inari?」と私にも聞き取りやすいようにゆっくりと尋ねてきました。「Yes! It's two stops away.」そう伝えると、夫婦は笑顔で何度も「Thank you! Thank you! アリガトウ!」と感謝の言葉を言いました。電車を降りてからも Good と親指でサインし、手を振り見送ってくれました。私の心はホワホワととても温かくなり、ほんの少しの勇氣から繋がる「ありがとう」がこんなにも心地よいものなのだと知りました。

私がしたことはほんの小さなことかもしれませんが。しかし、その小さなことの繰り返しが人と人とのつながり、思いの連鎖に繋がるのではないのでしょうか。困っている人がいたら声を掛ける、気付きを大切にする。勇氣を出して自ら行動に移せる人に私はなります。皆さんも勇氣・はじめの一步、踏み出してみませんか。